|  |
| --- |
| **銀河鉄道の夜**  宮沢 賢治 |

目次

一、の授業 9

二、活版所 14

三、家 33

四、ケンタウル祭の夜 41

五、の柱 47

六、銀河ステーション 62

七、北十字とプリオシン海岸 68

八、鳥をる人 77

九、ジョバンニの 84

銀河鉄道の夜

**一、の授業**

「ではみなさんは、そういうふうに川だとわれたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板にした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところをしながら、みんなにをかけました。

　カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちがするのでした。

　ところが先生は早くもそれをけたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょう。」

　ジョバンニはよく立ちあがりましたが、立って見るともうはっきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすっとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよっく調べると銀河は大体何でしょう。」

　やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

　先生はしばらく困ったようすでしたが、をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。

　先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、急いで「では。よし。」と云いながら、自分で星図をしました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

　ジョバンニはまっ赤になってうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかにはがいっぱいになりました。そうだは知っていたのだ、カムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんのからきな本をもってきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒ないっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れるもなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がってわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのでした。

　先生はまた云いました。

「ですからもしこののがほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のそこの砂やのにもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもっと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいるの球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかにんでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかにんでいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えしたがって白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。」

　先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面のレンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあって地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立ってこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こっちの方はレンズがいのでわずかの光る粒｜ち星しか見えないのでしょう。こっちやこっちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうっと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい。」

　そして教室中はしばらくのをあけたりしめたり本を重ねたりする音がいっぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

**二、活版所**

　ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭ののの木のところに集まっていました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流すを取りに行く相談らしかったのです。

　けれどもジョバンニは手を大きくってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきのにあかりをつけたりいろいろをしているのでした。

　家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲ってある大きな活版処にはいってすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニはをぬいで上りますと、き当りの大きなをあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんの輪転器がばたりばたりとまわり、きれで頭をしばったりラムプシェードをかけたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いてりました。

　ジョバンニはすぐ入口から三番目の高いにった人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらくをさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね。」と云いながら、一枚の紙切れをしました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たいをとりだして向うの電燈のたくさんついた、たてかけてあるの隅の所へしゃがみむと小さなピンセットでまるでぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこっちも向かずに冷くわらいました。

　ジョバンニは何べんも眼をいながら活字をだんだんひろいました。

　六時がうってしばらくたったころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たいをもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人はってそれを受け取ってかにうなずきました。

　ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニはかに顔いろがよくなってよくおじぎをすると台の下に置いたをもっておもてへ飛びだしました。それから元気よくをきながらパン屋へ寄ってパンのを一つと角砂糖を一｜買いますとに走りだしました。

**三、家**

　ジョバンニがよく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱にいろのケールやアスパラガスが植えてあって小さな二つの窓にはいが下りたままになっていました。

「おさん。いま帰ったよ。悪くなかったの。」ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日はしくてね。わたしはずうっと工合がいいよ。」

　ジョバンニはを上って行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口のに白いをってんでいたのでした。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って。」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」

「ああ三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

「来なかったろうかねえ。」

「ぼく行ってとって来よう。」

「あああたしはゆっくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行ったよ。」

「ではぼくたべよう。」

　ジョバンニは窓のところからトマトのをとってパンといっしょにしばらくむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきっと間もなく帰ってくると思うよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあったよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きっと出ているよ。お父さんがへ入るようなそんな悪いことをしたがないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へしたきなのらだのとなかいの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持って行くよ。一昨年修学旅行で〔以下数文字分空白〕

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもってくるといったねえ。」

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちょうどおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰るたびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコールラムプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなったとき石油をつかったら、がすっかりけたよ。」

「そうかねえ。」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしぃんとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。しっぽがまるでのようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角までついてくる。もっとついてくることもあるよ。今夜はみんなでのあかりを川へながしに行くんだって。きっと犬もついて行くよ。」

「そうだ。今晩は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「ああ行っておいで。川へははいらないでね。」

「ああぼく岸から見るだけなんだ。一時間で行ってくるよ。」

「もっと遊んでおいで。カムパネルラさんとなら心配はないから。」

「ああきっと一緒だよ。お母さん、窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね」

　ジョバンニは立って窓をしめお皿やパンの袋をけると勢よく靴をはいて

「では一時間半で帰ってくるよ。」と云いながら暗い戸口を出ました。

**四、ケンタウル祭の夜**

　ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、のまっ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

　坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニが、どんどん電燈の方へ下りて行きますと、いままでばけもののように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジョバンニのぼうしは、だんだんく黒くはっきりなって、足をあげたり手をったり、ジョバンニの横の方へまわって来るのでした。

（ぼくは立派な機関車だ。ここはだから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通りす。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるっとまわって、前の方へ来た。）

とジョバンニが思いながら、にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新らしいえりのったシャツを着て電燈の向う側の暗いから出て来て、ひらっとジョバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまだそう云ってしまわないうちに、

「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうしろからびました。

　ジョバンニは、ばっと胸がつめたくなり、そこら中きぃんと鳴るように思いました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家の中へはいっていました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはまるでのようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがばかなからだ。」

　ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまのや木ので、すっかりきれいにられた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこさえたふくろうの赤いが、くるっくるっとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚いのにって星のようにゆっくりったり、また向う側から、銅の人馬がゆっくりこっちへまわって来たりするのでした。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。

　ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

　それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのままのなかにめぐってあらわれるようになってりやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったような帯になってその下の方ではかすかにして湯気でもあげているように見えるのでした。またそのうしろには三本ののついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立っていましたしいちばんうしろのには空じゅうの星座をふしぎなやや魚やの形に書いた大きな図がかかっていました。ほんとうにこんなようなだの勇士だのそらにぎっしり居るだろうか、ああぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思ってたりしてしばらくぼんやり立って居ました。

　それからかにお母さんの牛乳のことを思いだしてジョバンニはその店をはなれました。そしてきゅうくつな上着のを気にしながらそれでもわざと胸を張って大きく手を振って町を通って行きました。

　空気はみきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまっ青なもみやの枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木などは、中にの豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのでした。子どもらは、みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりのをいたり、

「ケンタウルス、をふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

　ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木がも幾本も、高く星ぞらにんでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛ののするうすくらい台所の前に立って、ジョバンニはをぬいで「今晩は、」と云いましたら、家の中はしぃんとしても居たようではありませんでした。

「今晩は、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたってから、年った女の人が、どこかが悪いようにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云いました。

「あの、今日、牛乳がんとこへ来なかったので、いにあがったんです。」ジョバンニが一生けん命よく云いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

　その人は、赤い眼の下のとこをりながら、ジョバンニを見おろして云いました。

「おっかさんが病気なんですから今晩でないと困るんです。」

「ではもう少したってから来てください。」その人はもう行ってしまいそうでした。

「そうですか。ではありがとう。」ジョバンニは、おをして台所から出ました。

　十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜のを持ってやって来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思わずどきっとしてろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジョバンニが云おうとして、少しのどがつまったように思ったとき、

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニはまっ赤になって、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようとしましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒そうに、だまって少しわらって、らないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

　ジョバンニは、げるようにその眼をけ、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行って間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかえって見ましたら、ザネリがやはりふりかえって見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行ってしまったのでした。ジョバンニは、なんとも云えずさびしくなって、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてて、わああと云いながら片足でぴょんぴょんんでいた小さな子供らは、ジョバンニがくてかけるのだと思ってわあいと叫びました。まもなくジョバンニは黒いの方へ急ぎました。

**五、の柱**

　牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北のの下に、ぼんやりふだんよりも低く連って見えました。

　ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどんのぼって行きました。まっくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされてあったのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、ジョバンニは、さっきみんなの持って行ったのあかりのようだとも思いました。

　そのまっ黒な、松やの林をえると、かにがらんと空がひらけて、のがしらしらと南から北へっているのが見え、またの、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそうか野ぎくかの花が、そこらいちめんに、の中からでもりだしたというように咲き、鳥が一｜、丘の上を鳴き続けながら通って行きました。

　ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

　町の灯は、の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれのび声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジョバンニのでぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町のはずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

　そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、をいたり、わらったり、いろいろな風にしていると考えますと、ジョバンニは、もう何とも云えずかなしくなって、また眼をそらに挙げました。

　あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。

　ところがいくら見ていても、そのそらはひる先生の云ったような、がらんとした冷いとこだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やらある野原のように考えられて仕方なかったのです。そしてジョバンニは青いの星が、三つにも四つにもなって、ちらちらき、脚が何べんも出たり引っんだりして、とうとうのように長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまちまでがやっぱりぼんやりしたたくさんの星の集りか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

**六、銀河ステーション**

　そしてジョバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらくのように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。それはだんだんはっきりして、とうとうりんとうごかないようになり、いのそらの野原にたちました。いま新らしくいたばかりの青いの板のような、そらの野原に、まっすぐにすきっと立ったのです。

　するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションとう声がしたと思うといきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、まるで億万のの火を一ぺんに化石させて、そら中にめたという、またダイアモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざとれないふりをして、かくして置いたを、かがいきなりひっくりかえして、ばらいたという風に、眼の前がさあっと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼をってしまいました。

　気がついてみると、さっきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのでした。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながらっていたのです。車室の中は、青いを張ったけが、まるでがら明きで、向うのいろのワニスを塗ったには、の大きなぼたんが二つ光っているのでした。

　すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きました。そしてそのこどもののあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこっちも窓から顔を出そうとしたとき、俄かにその子供が頭を引っ込めて、こっちを見ました。

　それはカムパネルラだったのです。

　ジョバンニが、カムパネルラ、きみは前からここに居たのと云おうと思ったとき、カムパネルラが

「みんなはねずいぶん走ったけれどもれてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。」と云いました。

　ジョバンニは、（そうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそって出掛けたのだ。）とおもいながら、

「どこかで待っていようか」と云いました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんがいにきたんだ。」

　カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしな気持ちがしてだまってしまいました。

　ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、よく云いました。

「ああしまった。ぼく、を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいたって、ぼくはきっと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったくその中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のようにまっ黒なの上に、一一の停車場や、泉水や森が、青やや緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

　ジョバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通ったろうか。いまぼくたちの居るとこ、ここだろう。」

　ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北をしました。

「そうだ。おや、あのは月夜だろうか。」

　そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジョバンニは云いながら、まるではね上りたいくらいになって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりのをきながら一生けん命延びあがって、その天の川の水を、見きわめようとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はっきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおって、ときどきの加減か、ちらちらいろのこまかな波をたてたり、のようにぎらっと光ったりしながら、声もなくどんどん流れて行き、野原にはあっちにもこっちにも、の三角標が、うつくしく立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではっきりし、近いものは青白く少しかすんで、いは三角形、或いは四辺形、あるいはやの形、さまざまにならんで、野原いっぱい光っているのでした。ジョバンニは、まるでどきどきして、頭をやけにりました。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたりえたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た。」ジョバンニは云いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」ジョバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云いました。

「アルコールか電気だろう。」カムパネルラが云いました。

　ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろいの中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

　線路のへりになったみじかいの中に、月長石ででもまれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」ジョバンニは胸をらせて云いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから。」

　カムパネルラが、そう云ってしまうかしまわないうち、次のりんどうの花が、いっぱいに光って過ぎて行きました。

　と思ったら、もう次から次から、たくさんのきいろな底をもったりんどうの花のコップが、くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ光って立ったのです。

**七、北十字とプリオシン海岸**

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。」

　いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、きこんでいました。

　ジョバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおっかさんは、あの遠い一つのちりのように見えるいろの三角標のあたりにいらっしゃって、いまぼくのことを考えているんだった。）と思いながら、ぼんやりしてだまっていました。

「ぼくはおっかさんが、ほんとうにになるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」ジョバンニはびっくりしてびました。

「ぼくわからない。けれども、だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。

　かに、車のなかが、ぱっと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、や草のやあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河のの上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうっと青白く後光のした一つの島が見えるのでした。その島の平らないただきに、立派な眼もさめるような、白いがたって、それはもうった北極の雪でたといったらいいか、すきっとした金いろの円光をいただいて、しずかに永久に立っているのでした。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声が起りました。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきもののひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、のをかけたり、どの人もつつましく指を組み合せて、そっちにっているのでした。思わず二人もまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラのは、まるで熟したのあかしのようにうつくしくかがやいて見えました。

　そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

　向う岸も、青じろくぽうっと光ってけむり、時々、やっぱりすすきが風にひるがえるらしく、さっとその銀いろがけむって、息でもかけたように見え、また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしいのように思われました。

　それもほんのちょっとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうっと遠く小さく、絵のようになってしまい、またすすきがざわざわ鳴って、とうとうすっかり見えなくなってしまいました。ジョバンニのうしろには、いつから乗っていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風のさんが、まん円な緑のを、じっとまっすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そっちから伝わって来るのを、んで聞いているというように見えました。旅人たちはしずかに席にり、二人も胸いっぱいのかなしみに似た新らしい気持ちを、何気なくちがったで、そっとし合ったのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、十一時かっきりには着くんだよ。」

　早くも、シグナルの緑のと、ぼんやり白い柱とが、ちらっと窓のそとを過ぎ、それからのほのおのようなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになって、間もなくプラットホームの一列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなってひろがって、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

　さわやかな秋の時計のには、青くかれたはがねの二本の針が、くっきり十一時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなってしまいました。

〔二十分停車〕と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジョバンニが云いました。

「降りよう。」

　二人は一度にはねあがってドアを飛び出してへかけて行きました。ところが改札口には、明るいがかった電燈が、一ついているばかり、も居ませんでした。そこら中を見ても、駅長やらしい人の、もなかったのです。

　二人は、停車場の前の、水晶細工のように見えるの木に囲まれた、小さな広場に出ました。そこからの広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通っていました。

　さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、をならべて行きますと、二人の影は、ちょうど四方に窓のあるの中の、二本の柱の影のように、また二つの車輪ののようにも幾本も四方へ出るのでした。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいなに来ました。

　カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、にひろげ、指できしきしさせながら、のように云っているのでした。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」どこでぼくは、そんなこと習ったろうと思いながら、ジョバンニもぼんやり答えていました。

　河原のは、みんなすきとおって、たしかに水晶やや、またくしゃくしゃのをあらわしたのや、またからのような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジョバンニは、走ってそのに行って、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりももっとすきとおっていたのです。それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたったとこが、少し水銀いろにいたように見え、その手首にぶっつかってできた波は、うつくしいをあげて、ちらちらと燃えるように見えたのでもわかりました。

　川上の方を見ると、すすきのいっぱいに生えているの下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿って出ているのでした。そこに小さな五六人の人かげが、何かり出すか埋めるかしているらしく、立ったりんだり、時々なにかの道具が、ピカッと光ったりしました。

「行ってみよう。」二人は、まるで一度に叫んで、そっちの方へ走りました。その白い岩になったの入口に、

〔プリオシン海岸〕という、のつるつるした標札が立って、向うの渚には、ところどころ、細い鉄のも植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきのったくるみの実のようなものをひろいました。

「くるみの実だよ。そら、ある。流れて来たんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

「早くあすこへ行って見よう。きっと何か掘ってるから。」

　二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近よって行きました。左手の渚には、波がやさしいのように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀やでこさえたようなすすきのがゆれたのです。

　だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、をふりあげたり、スコープをつかったりしている、三人の助手らしい人たちにでいろいろ指図をしていました。

「そこのそのをさないように。スコープを使いたまえ、スコープを。おっと、も少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

　見ると、その白いらかな岩の中から、大きな大きな青じろいの骨が、横にれてれたという風になって、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて見ると、そこらには、の二つあるのついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、をきらっとさせて、こっちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あったろう。それはまあ、ざっと百二十万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新らしい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているとこに、そっくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといってね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。ていねいにでやってくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するにるんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらい前にできたというもいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかったかい。けれども、おいおい。そこもスコープではいけない。そのすぐ下にが埋もれてるじゃないか。」大学士はあわてて走って行きました。

「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図ととをくらべながら云いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジョバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら。」大学士は、またがしそうに、あちこち歩きまわってをはじめました。二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないように走りました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れずもあつくなりませんでした。

　こんなにしてかけるなら、もう世界中だってかけれると、ジョバンニは思いました。

　そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、間もなく二人は、もとの車室の席にって、いま行って来た方を、窓から見ていました。

**八、鳥をる人**

「ここへかけてもようございますか。」

　がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

　それは、茶いろの少しぼろぼろのを着て、白いでつつんだ荷物を、二つに分けて肩にけた、のせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジョバンニは、少し肩をすぼめてしました。その人は、ひげの中でかすかにいながら荷物をゆっくりにのせました。ジョバンニは、なにか大へんさびしいようなかなしいような気がして、だまって正面の時計を見ていましたら、ずうっと前の方で、ののようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていたのです。カムパネルラは、車室のを、あちこち見ていました。その一つのあかりに黒いがとまってその影が大きく天井にうつっていたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらいながら、ジョバンニやカムパネルラのようすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなって、すすきと川と、かわるがわる窓の外から光りました。

　赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人にきました。

「あなた方は、どちらへいらっしゃるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジョバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じっさい、どこまででも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、のようにたずねましたので、ジョバンニは、思わずわらいました。すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きなをに下げた人も、ちらっとこっちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別にったでもなく、をぴくぴくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴やです。さぎも白鳥もです。」

「鶴はたくさんいますか。」

「居ますとも、さっきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。」

「いいえ。」

「いまでも聞えるじゃありませんか。そら、耳をすましていてごらんなさい。」

　二人はを挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水のくような音が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それともですか。」

「鷺です。」ジョバンニは、どっちでもいいと思いながら答えました。

「そいつはな、ない。さぎというものは、みんな天の川の砂がって、ぼおっとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、をこういう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたっとえちまうんです。するともう鷺は、かたまって安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切ってまさあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいももありませんや。そら。」その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです。」

「ほんとうに鷺だねえ。」二人は思わずびました。まっ白な、あのさっきの北ののように光る鷺のからだが、十ばかり、少しひらべったくなって、黒い脚をちぢめて、のようにならんでいたのです。

「眼をつぶってるね。」カムパネルラは、指でそっと、鷺の三日月がたの白いった眼にさわりました。頭の上ののような白い毛もちゃんとついていました。

「ね、そうでしょう。」鳥捕りはを重ねて、またくるくると包んででくくりました。がいったいここらで鷺なんぞべるだろうとジョバンニは思いながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかしの方が、もっと売れます。雁の方がずっとがいいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちょうどさっきの鷺のように、くちばしをえて、少しべったくなって、ならんでいました。

「こっちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チョコレートででもできているように、すっときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」鳥捕りは、それを二つにちぎってわたしました。ジョバンニは、ちょっと喰べてみて、（なんだ、やっぱりこいつはおだ。チョコレートよりも、もっとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこらの野原のだ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。）とおもいながら、やっぱりぽくぽくそれをたべていました。

「も少しおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジョバンニは、もっとたべたかったのですけれども、

「ええ、ありがとう。」とってしましたら、鳥捕りは、こんどは向うの席の、をもった人に出しました。

「いや、商売ものをっちゃすみませんな。」その人は、をとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年のりの景気は。」

「いや、すてきなもんですよ。の第二限ころなんか、なぜ燈台のを、規則以外に間　させるかって、あっちからもこっちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こっちがやるんじゃなくて、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまって、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしぁ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのとこへ持って来たって仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口とのもなく細い大将へやれって、う云ってやりましたがね、はっは。」

　すすきがなくなったために、向うの野原から、ぱっとあかりがして来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さっきから、訊こうと思っていたのです。

「それはね、鷺を喰べるには、」鳥捕りは、こっちに向き直りました。

「天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、そうでなけぁ、砂に三四日うずめなけぁいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」やっぱりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルラが、思い切ったというように、ねました。鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

「そうそう、ここで降りなけぁ。」と云いながら、立って荷物をとったと思うと、もう見えなくなっていました。

「どこへ行ったんだろう。」

　二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑って、少しびあがるようにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそっちを見ましたら、たったいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしいを出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立って、まじめな顔をして両手をひろげて、じっとそらを見ていたのです。

「あすこへ行ってる。ずいぶんだねえ。きっとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走って行かないうちに、早く鳥がおりるといいな。」と云った、がらんとしたいろの空から、さっき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いっぱいにいおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかっきり六十度に開いて立って、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手でっから押えて、布のの中に入れるのでした。すると鷺は、のように、袋の中でしばらく、青くぺかぺか光ったり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられないで無事にのの砂の上に降りるものの方が多かったのです。それは見ていると、足が砂へつくやや、まるで雪のけるように、まってべったくなって、間もなくから出た銅ののように、砂やの上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についているのでしたが、それも二三度明るくなったり暗くなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになってしまうのでした。

　鳥捕りは二十｜ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊がにあたって、死ぬときのような形をしました。と思ったら、もうそこに鳥捕りの形はなくなって、って、

「ああせいせいした。どうもからだに合うほどいでいるくらい、いいことはありませんな。」というききおぼえのある声が、ジョバンニのりにしました。見ると鳥捕りは、もうそこでとって来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直しているのでした。

「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか。」ジョバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気がして問いました。

「どうしてって、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」

　ジョバンニは、すぐ返事しようと思いましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまっ赤にして何か思い出そうとしているのでした。

「ああ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかったというように雑作なくうなずきました。

**九、ジョバンニの**

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

　窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四｜ばかり立って、その一つの平屋根の上に、もさめるような、との大きな二つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるくるとまわっていました。黄いろのがだんだん向うへまわって行って、青い小さいのがこっちへ進んで来、間もなく二つのはじは、重なり合って、きれいな緑いろの両面｜レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパースの正面に来ましたので、緑の中心と黄いろな明るいとができました。それがまただんだん横へれて、前のレンズの形を逆にり返し、とうとうすっとはなれて、サファイアは向うへめぐり、黄いろのはこっちへ進み、また丁度さっきのような風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、っているように、しずかによこたわったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」りが云いかけたとき、

「切符を拝見いたします。」三人の席の横に、赤いをかぶったせいの高いが、いつかまっすぐに立っていて云いました。鳥捕りは、だまってかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちょっと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）というように、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困って、もじもじしていましたら、カムパネルラは、わけもないという風で、小さないろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててしまって、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きなんだ紙きれにあたりました。こんなもの入っていたろうかと思って、急いで出してみましたら、それは四つに折ったはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですから何でも構わない、やっちまえと思って渡しましたら、車掌はまっすぐに立ち直ってにそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしていましたし燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、ジョバンニはたしかにあれは証明書か何かだったと考えて少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになったのですか。」車掌がたずねました。

「何だかわかりません。」もうだと安心しながらジョバンニはそっちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。へ着きますのは、次の第三時ころになります。」車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行きました。

　カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ち兼ねたというように急いでのぞきこみました。ジョバンニも全く早く見たかったのです。ところがそれはいちめん黒いのような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したものでだまって見ていると何だかその中へ吸いまれてしまうような気がするのでした。すると鳥捕りが横からちらっとそれを見てあわてたように云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれぁ、なるほど、こんな不完全な第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行けるでさあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジョバンニが赤くなって答えながらそれを畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々大したもんだというようにちらちらこっちを見ているのがぼんやりわかりました。

「もうじきの停車場だよ。」カムパネルラが向う岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とをべて云いました。

　ジョバンニはなんだかわけもわからずににわかにとなりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。をつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたように横目で見てあわててほめだしたり、そんなことを一一考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持っているものでも食べるものでもなんでもやってしまいたい、もうこの人のほんとうのになるなら自分があの光る天の川のに立って百年つづけて立って鳥をとってやってもいいというような気がして、どうしてももうっていられなくなりました。ほんとうにあなたのほしいものは一体何ですか、とこうとして、それではあんまり出しけだから、どうしようかと考えてり返って見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。の上には白い荷物も見えなかったのです。また窓の外で足をふんばってそらを見上げて鷺を捕るをしているのかと思って、急いでそっちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかもった帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行ったろう。」カムパネルラもぼんやりそう云っていました。

「どこへ行ったろう。一体どこでまたあうのだろう。はどうしても少しあの人に物を言わなかったろう。」

「ああ、僕もそう思っているよ。」

「僕はあの人がなような気がしたんだ。だから僕は大へんつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで云ったこともないと思いました。

「何だかのがする。僕いま苹果のこと考えたためだろうか。」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果の匂だよ。それからの匂もする。」ジョバンニもそこらを見ましたがやっぱりそれは窓からでも入って来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジョバンニは思いました。

　そしたらかにそこに、つやつやした黒いの六つばかりの男の子が赤いジャケツのぼたんもかけずひどくびっくりしたような顔をしてがたがたふるえてはだしで立っていました。りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風にかれているけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ。」青年のうしろにもひとり十二ばかりの眼の茶いろならしい女の子が黒いを着て青年のにすがって不思議そうに窓の外を見ているのでした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカット州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまにされているのです。」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子にいました。けれどもなぜかまた額に深くを刻んで、それに大へんつかれているらしく、無理に笑いながら男の子をジョバンニのとなりにらせました。

　それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへ座って、きちんと両手を組み合せました。

「ぼくおおねえさんのとこへ行くんだよう。」けたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向うの席に座ったばかりの青年に云いました。青年は何とも云えず悲しそうな顔をして、じっとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしゃいます。それよりも、おっかさんはどんなに永く待っていらっしゃったでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにわとこのやぶをまわってあそんでいるだろうかと考えたりほんとうに待って心配していらっしゃるんですから、早く行っておっかさんにお目にかかりましょうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなけぁよかったなあ。」

「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツインクル、ツインクル、リトル、スター　をうたってやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」

　泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそっと姉弟にまた云いました。

「わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないいとこを旅して、じき神さまのとこへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きっとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元気を出しておもしろくうたって行きましょう。」青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなをめながら、自分もだんだん顔いろがかがやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらっしゃったのですか。どうなすったのですか。」さっきの燈台看守がやっと少しわかったように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山にぶっつかって船がみましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになったのであとからったのです。私は大学へはいっていて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちょうど十二日目、今日かのあたりです、船が氷山にぶっつかって一ぺんにきもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、が非常に深かったのです。ところがボートはの方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となって、どうか小さな人たちを乗せて下さいとびました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのためにってれました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とてもしのける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたから前にいる子供らを押しのけようとしました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりでしょってぜひとも助けてあげようと思いました。けれどもどうして見ているとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんがのようにキスを送りお父さんがかなしいのをじっとこらえてまっすぐに立っているなどとてももうもちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかりしてこの人たち二人をいて、べるだけは浮ぼうとかたまって船の沈むのを待っていました。が投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたけれどもってずうっと向うへ行ってしまいました。私は一生けん命でのになったとこをはなして、三人それにしっかりとりつきました。どこからともなく　　番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのときかに大きな音がして私たちは水に落ちもうに入ったと思いながらしっかりこの人たちをだいてそれからぼうっとしたと思ったらもうここへ来ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年くなられました。ええボートはきっと助かったにちがいありません、何せよほど熟練な水夫たちがいですばやく船からはなれていましたから。」

　そこらから小さないのりの声が聞えジョバンニもカムパネルラもいままで忘れていたいろいろのことをぼんやり思い出してが熱くなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったろうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風やりつく潮水や、しい寒さとたたかって、たれかが一生けんめいはたらいている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろう。）ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎんでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でのできごとならの上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。」

　燈台守がなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです。」

　青年が祈るようにそう答えました。

　そしてあのはもうつかれてめいめいぐったり席によりかかってっていました。さっきのあのはだしだった足にはいつか白いらかなをはいていたのです。

　ごとごとごとごと汽車はきらびやかなの川の岸を進みました。向うの方の窓を見ると、野原はまるでのようでした。百も千もの大小さまざまの三角標、その大きなものの上には赤い点点をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集ってぼおっと青白い霧のよう、そこからかまたはもっと向うからかときどきさまざまの形のぼんやりしたのようなものが、かわるがわるきれいないろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおったな風は、ばらのでいっぱいでした。

「いかがですか。こういうはおはじめてでしょう。」向うの席の燈台看守がいつかと紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないように両手での上にかかえていました。

「おや、どっから来たのですか。立派ですねえ。ここらではこんな苹果ができるのですか。」青年はほんとうにびっくりしたらしく燈台看守の両手にかかえられた一もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめていました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」

　青年は一つとってジョバンニたちの方をちょっと見ました。

「さあ、向うのちゃんがた。いかがですか。おとり下さい。」

　ジョバンニは坊ちゃんといわれたのですこししゃくにさわってだまっていましたがカムパネルラは

「ありがとう、」と云いました。すると青年は自分でとって一つずつ二人に送ってよこしましたのでジョバンニも立ってありがとうと云いました。

　燈台看守はやっとがあいたのでこんどは自分で一つずつ睡っている姉弟の膝にそっと置きました。

「どうもありがとう。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

　青年はつくづく見ながら云いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりでにいいものができるようなになってります。農業だってそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望むさえけばひとりでにどんどんできます。米だってパシフィック辺のようにもないし十倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあなたがたのいらっしゃる方なら農業はもうありません。苹果だってお菓子だってかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとによってちがったわずかのいいかおりになって毛あなからちらけてしまうのです。」

　にわかに男の子がぱっちり眼をあいて云いました。

「ああぼくいまお母さんのをみていたよ。お母さんがね立派なや本のあるとこに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこにこわらったよ。ぼくおっかさん。りんごをひろってきてあげましょうか云ったら眼がさめちゃった。ああここさっきの汽車のなかだねえ。」

「そのがそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ。」青年が云いました。

「ありがとうおじさん。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらったよ。おきてごらん。」

　姉はわらって眼をさましまぶしそうに両手を眼にあててそれから苹果を見ました。男の子はまるでパイをべるようにもうそれを喰べていました、またいたそのきれいな皮も、くるくるコルクきのような形になってへ落ちるまでの間にはすうっと、灰いろに光って蒸発してしまうのでした。

　二人はりんごを大切にポケットにしまいました。

　川下の向う岸に青くった大きな林が見え、そのには熟してまっ赤に光る円い実がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじって何とも云えずきれいな音いろが、とけるようにみるように風につれて流れて来るのでした。

　青年はぞくっとしてからだをふるうようにしました。

　だまってそのを聞いていると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原か敷物かがひろがり、またまっ白なのようなが太陽の面をめて行くように思われました。

「まあ、あの。」カムパネルラのとなりのかおると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なくるように叫びましたので、ジョバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったくの青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱいに列になってとまってじっと川のを受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのとこに毛がぴんと延びてますから。」青年はとりなすように云いました。

　向うの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面に来ました。そのとき汽車のずうっとうしろの方からあの聞きなれた　　番ののふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのでした。青年はさっと顔いろが青ざめ、たって一ぺんそっちへ行きそうにしましたが思いかえしてまたりました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。ジョバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつともなくともなくその歌は歌い出されだんだんはっきり強くなりました。思わずジョバンニもカムパネルラもにうたい出したのです。

　そして青いの森が見えない天の川の向うにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行ってしまいそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひびきや風の音にすりらされてずうっとかすかになりました。

「あが居るよ。」

「ええたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

　ジョバンニはその小さく小さくなっていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのように見える森の上にさっさっと青じろく時々光ってその孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の反射を見ました。

「そうだ、孔雀の声だってさっき聞えた。」カムパネルラがかおる子にいました。

「ええ、三十｜ぐらいはたしかに居たわ。ハープのように聞えたのはみんな孔雀よ。」女の子が答えました。ジョバンニはかに何とも云えずかなしい気がして思わず

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ。」とこわい顔をして云おうとしたくらいでした。

　川は二つにわかれました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれてその上に一人のい服を着て赤いをかぶった男が立っていました。そして両手に赤と青の旗をもってそらを見上げて信号しているのでした。ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていましたが俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすようにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のようにしくりました。すると空中にざあっと雨のような音がして何かまっくらなものがいくかたまりもいくかたまりものように川の向うの方へ飛んで行くのでした。ジョバンニは思わず窓からからだを半分出してそっちを見あげました。美しい美しいいろのがらんとした空の下を実に何万という小さな鳥どもがも幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通って行くのでした。

「鳥が飛んで行くな。」ジョバンニが窓の外で云いました。

「どら、」カムパネルラもそらを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげてのようにふりうごかしました。するとぴたっと鳥の群は通らなくなりそれと同時にぴしゃぁんというれたような音が川下の方で起ってそれからしばらくしいんとしました。と思ったらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふってんでいたのです。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはっきり聞えました。それといっしょにまた幾万という鳥の群がそらをまっすぐにかけたのです。二人の顔を出しているまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しいをかがやかせながらそらをぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだいと思いながらだまって口をむすんでそらを見あげていました。女の子は小さくほっと息をしてだまって席へりました。カムパネルラが気の毒そうに窓から顔を引っめて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしょうか。」女の子がそっとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きっとどこからかのろしがあがるためでしょう。」カムパネルラが少しおぼつかなそうに答えました。そして車の中はしぃんとなりました。ジョバンニはもう頭を引っ込めたかったのですけれども明るいとこへ顔を出すのがつらかったのでだまってこらえてそのまま立ってをいていました。

（どうしてはこんなにかなしいのだろう。僕はもっとこころもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうっと向うにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。僕はあれをよく見てこころもちをしずめるんだ。）ジョバンニはって痛いあたまを両手でえるようにしてそっちの方を見ました。（ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパネルラだってあんな女の子とおもしろそうにしているし僕はほんとうにつらいなあ。）ジョバンニの眼はまたでいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行ったようにぼんやり白く見えるだけでした。

　そのとき汽車はだんだん川からはなれての上を通るようになりました。向う岸もまた黒いいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがってだんだん高くなって行くのでした。そしてちらっと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きなが赤い毛をいて真珠のような実もちらっと見えたのでした。それはだんだん数を増して来てもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバンニが窓から顔を引っ込めて向う側の窓を見ましたときは美しいそらの野原の地平線のはてまでその大きなとうもろこしの木がほとんどいちめんに植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸ったのようにがいっぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのでした。カムパネルラが「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに云いましたけれどもジョバンニはどうしても気持がなおりませんでしたからただぶっきり棒に野原を見たまま「そうだろう。」と答えました。そのとき汽車はだんだんしずかになっていくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

　その正面の青じろい時計はかっきり第二時を示しそのは風もなくなり汽車もうごかずしずかなしずかな野原のなかにカチッカチッと正しく時を刻んで行くのでした。

　そしてまったくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかなが糸のように流れて来るのでした。「新世界だわ。」姉がひとりごとのようにこっちを見ながらそっと云いました。全くもう車の中ではあの黒服のい青年ももみんなやさしいを見ているのでした。

（こんなしずかないいとこで僕はどうしてもっとになれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょに汽車に乗っていながらまるであんな女の子とばかりしているんだもの。僕はほんとうにつらい。）ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見つめていました。すきとおったのような笛が鳴って汽車はしずかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方でかとしよりらしい人のいまがさめたという風ではきはき談している声がしました。

「とうもろこしだって棒で二尺もをあけておいてそこへかないと生えないんです。」

「そうですか。川まではよほどありましょうかねえ、」

「ええええ河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどいになっているんです。」

　そうそうここはコロラドの高原じゃなかったろうか、ジョバンニは思わずそう思いました。カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだのような顔いろをしてジョバンニの見る方を見ているのでした。とうもろこしがなくなってきな黒い野原がいっぱいにひらけました。新世界交響楽はいよいよはっきり地平線のはてからきそのまっ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石をと胸にかざり小さな弓に矢をえてに汽車を追って来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」

　黒服の青年も眼をさましました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走って来るわ、あら、走って来るわ。追いかけているんでしょう。」

「いいえ、汽車を追ってるんじゃないんですよ。をするかるかしてるんですよ。」青年はいまどこに居るか忘れたという風にポケットに手を入れて立ちながら云いました。

　まったくインデアンは半分は踊っているようでした。第一かけるにしても足のふみようがもっと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくっきり白いその羽根は前の方へれるようになりインデアンはぴたっと立ちどまってすばやく弓を空にひきました。そこから一羽のがふらふらと落ちて来てまた走り出したインデアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそうに立ってわらいました。そしてその鶴をもってこっちを見ているももうどんどん小さく遠くなり電しんばしらのがきらっきらっと続いて二つばかり光ってまたとうもろこしの林になってしまいました。こっち側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高いの上を走っていてその谷の底には川がやっぱりひろく明るく流れていたのです。

「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。このがあるもんですから汽車は決して向うからこっちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなったでしょう。」さっきの老人らしい声が云いました。

　どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじに鉄道がかかるときは川が明るく下にのぞけたのです。ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなって来ました。汽車が小さな小屋の前を通ってその前にしょんぼりひとりの子供が立ってこっちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

　どんどんどんどん汽車は走って行きました。のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながらにしっかりしがみついていました。ジョバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほどしく流れて来たらしくときどきちらちら光ってながれているのでした。うすあかいなでしこの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ち着いたようにゆっくりと走っていました。

　向うとこっちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたっていました。

「あれ何の旗だろうね。」ジョバンニがやっとものを云いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ。」

「ああ。」

「橋をけるとこじゃないんでしょうか。」女の子が云いました。

「あああれ工兵の旗だねえ。演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

　その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらっと光って柱のように高くはねあがりどぉとしい音がしました。

「だよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりしました。

　その柱のようになった水は見えなくなり大きなやがきらっきらっと白く腹を光らせて空中にり出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジョバンニはもうはねあがりたいくらい気持が軽くなって云いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかがまるでこんなになってはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もいるんでしょうか。」女の子がにつりまれて云いました。

「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだからいま小さいの見えなかったねえ。」ジョバンニはもうすっかりが直ってそうにわらって女の子に答えました。

「あれきっとのお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外をさしてびました。

　右手の低いの上に小さなででもこさえたような二つのお宮がならんで立っていました。

「双子のお星さまのお宮って何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんからいたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならんでいるからきっとそうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したっての。」

「ぼくも知ってらい。双子のお星さまが野原へ遊びにでてからすとしたんだろう。」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おっかさんお話なすったわ、……」

「それからがギーギーフーギーギーフーて云って来たねえ。」

「いやだわたあちゃんそうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」

「するとあすこにいまをいて居るんだろうか。」

「いま海へ行ってらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがっていらっしゃったのよ。」

「そうそう。ぼく知ってらあ、ぼくおはなししよう。」

　川の向う岸がかに赤くなりました。の木や何かもまっ黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に大きなまっ赤な火が燃されその黒いけむりは高くいろのつめたそうな天をもがしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりリチウムよりもうつくしくったようになってその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう。」ジョバンニがいました。

「の火だな。」カムパネルラが地図と首っ引きして答えました。

「あら、蝎の火のことならあたし知ってるわ。」

「蝎の火ってなんだい。」ジョバンニがききました。

「蝎がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聴いたわ。」

「蝎って、虫だろう。」

「ええ、蝎は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蝎いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあってそれでされると死ぬって先生が云ったよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さんう云ったのよ。むかしのバルドラの野原に一ぴきの蝎がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。するとある日いたちにかって食べられそうになったんですって。さそりは一生けん命げて遁げたけどとうとういたちにえられそうになったわ、そのときいきなり前に井戸があってその中に落ちてしまったわ、もうどうしてもあがられないでさそりはれはじめたのよ。そのときさそりは斯う云っておりしたというの、

　ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになってしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちにれてやらなかったろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなののために私のからだをおつかい下さい。って云ったというの。そしたらいつか蝎はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしているのを見たって。いまでも燃えてるってお父さんったわ。ほんとうにあの火それだわ。」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちょうどさそりの形にならんでいるよ。」

　ジョバンニはまったくその大きな火の向うに三つの三角標がちょうどさそりののようにこっちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

　その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云えずにぎやかなさまざまの楽のや草花ののようなもの口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあってそこにお祭でもあるというような気がするのでした。

「ケンタウルをふらせ。」いきなりいままでっていたジョバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながら叫んでいました。

　ああそこにはクリスマストリイのようにまっ青なかもみの木がたってその中にはたくさんのたくさんのがまるで千のでも集ったようについていました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」カムパネルラがすぐ云いました。〔以下原稿一枚？なし〕

「ボール投げなら決してはずさない。」

　男の子がりで云いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりるをして下さい。」青年がみんなに云いました。

「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ。」男の子が云いました。カムパネルラのとなりの女の子はそわそわ立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジョバンニたちとわかれたくないようなようすでした。

「ここでおりなけぁいけないのです。」青年はきちっと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

「だい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

　ジョバンニがこらえ兼ねて云いました。

「僕たちとに乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける持ってるんだ。」

「だけどあたしたちもうここで降りなけぁいけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから。」女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくたっていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりももっといいとこをこさえなけぁいけないって僕の先生が云ったよ。」

「だっておっ母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまがっしゃるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだい。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」青年は笑いながら云いました。

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんとうのたった一人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です。」

「ああ、そんなんでなしにたったひとりのほんとうのほんとうの神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつつましく両手を組みました。女の子もちょうどその通りにしました。みんなほんとうに別れがしそうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

　ああそのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青ややもうあらゆる光でちりばめられたがまるで一本の木という風に川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲がまるいになって後光のようにかかっているのでした。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立ってお祈りをはじめました。あっちにもこっちにも子供がに飛びついたときのようなよろこびの声や何とも云いようない深いつつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあのの肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかにっているのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラッパの声をききました。そしてたくさんのシグナルや電燈ののなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちょうどま向いに行ってすっかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」女の子がふりかえって二人に云いました。

「さよなら。」ジョバンニはまるで泣き出したいのをこらえてったようにぶっきり棒に云いました。女の子はいかにもつらそうにを大きくしても一度こっちをふりかえってそれからあとはもうだまって出て行ってしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまいかにがらんとしてさびしくなり風がいっぱいにきみました。

　そして見ているとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたってひとりのしい白いきものの人が手をのばしてこっちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもうのは鳴らされ汽車はうごき出しと思ううちに銀いろのが川下の方からすうっと流れて来てもうそっちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ちの円光をもった電気がい顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

　そのときすうっと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の一列についた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちょうどでもするようにぽかっと消え二人が過ぎて行くときまたくのでした。

　ふりかえって見るとさっきの十字架はすっかり小さくなってしまいほんとうにもうそのまま胸にもされそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白いにまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行ったのかぼんやりして見分けられませんでした。

　ジョバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなののためならば僕のからだなんか百ぺんいてもかまわない。」

「うん。僕だってそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいながうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジョバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちしっかりやろうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新らしい力がくようにふうと息をしながら云いました。

「あ、あすこ石炭だよ。そらのだよ。」カムパネルラが少しそっちをけるようにしながら天の川のひととこを指さしました。ジョバンニはそっちを見てまるでぎくっとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまっくらな孔がどほんとあいているのです。その底がどれほど深いかそのに何があるかいくら眼をこすってのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛むのでした。ジョバンニが云いました。

「僕もうあんな大きなの中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきっと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集ってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あっあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラはかに窓の遠くに見えるきれいな野原を指してびました。

　ジョバンニもそっちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云ったように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてぼんやりそっちを見ていましたら向うの河岸に二本の電信ばしらが丁度両方からを組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニがう云いながらふりかえって見ましたらそのいままでカムパネルラのっていた席にもうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかりひかっていました。ジョバンニはまるでのように立ちあがりました。そしてにも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもういっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになったように思いました。

　ジョバンニは眼をひらきました。もとのの草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしくりにはつめたい涙がながれていました。

　ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさっきの通りに下でたくさんの灯をってはいましたがその光はなんだかさっきよりは熱したという風でした。そしてたったいまであるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかかりまっ黒な南の地平線の上ではにけむったようになってその右にはの赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変ってもいないようでした。

　ジョバンニは一さんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっぱいに思いだされたのです。どんどん黒いの林の中を通ってそれからほの白い牧場のをまわってさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かがいま帰ったらしくさっきなかった一つの車が何かのを二つ乗っけて置いてありました。

「今晩は、」ジョバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行って一本のをもって来てジョバンニにしながらまた云いました。

「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうっかりしてこうしの棚をあけて置いたもんですから大将早速親牛のところへ行って半分ばかり呑んでしまいましてね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいて行きます。」

「ええ、どうも済みませんでした。」

「いいえ。」

　ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもって牧場の柵を出ました。

　そしてしばらく木のある町を通って大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になってその右手の方、通りのはずれにさっきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

　ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいずつ集って橋の方を見ながら何かひそひそしているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいっぱいなのでした。

　ジョバンニはなぜかさあっと胸が冷たくなったように思いました。そしていきなり近くの人たちへ

「何かあったんですか。」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちはにジョバンニの方を見ました。ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱいで河が見えませんでした。白い服を着たも出ていました。

　ジョバンニは橋のから飛ぶように下の広い河原へおりました。

　その河原のに沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。向う岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもうのあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにしずかに流れていたのでした。

　河原のいちばん下流の方へのようになって出たところに人の集りがくっきりまっ黒に立っていました。ジョバンニはどんどんそっちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさっきカムパネルラといっしょだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄ってきました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へしてやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれどもからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

　ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろいったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

　みんなもじっと河を見ていました。も一言も物を云う人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えるのでした。

　下流の方は川はば一ぱい銀河がきく写ってまるで水のないそのままのそらのように見えました。

　ジョバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかいないというような気がしてしかたなかったのです。

　けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るかいはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がして仕方ないらしいのでした。けれどもかにカムパネルラのお父さんがきっぱり云いました。

「もうです。落ちてから四十五分たちましたから。」

　ジョバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っていますぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのですと云おうとしましたがもうのどがつまって何とも云えませんでした。すると博士はジョバンニがに来たとでも思ったものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたが

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晩はありがとう。」とねいに云いました。

　ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士はく時計をったまままたききました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには大へん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船がれたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

　そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっぱいにうつった方へじっと眼を送りました。

　ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りました。

|  |
| --- |
| **銀河鉄道の夜**  二〇●●年●月●日　初版発行  著　者　　宮沢賢治  発行所　　●●出版  　　　　　東京都文京区〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇  　　　　　〒一一二‐〇〇〇〇  　　　　　電話　　〇三‐〇〇〇〇‐〇〇〇〇  　　　　　ＦＡＸ　〇三‐〇〇〇〇‐〇〇〇〇  印刷所　　●●印刷  ©Kenji Miyazawa 20●● Printed in Japan  ※弊社から販売・流通をご希望の場合は、記載事項に規定がございます。「流通なし」の場合は、ご自由に記載していただけます。 |